

鶴見 俊輔 上野 千鶴子 著  
小英二

(新曜社・2940円)

# 戦争が遺したもの

ユーモアあふれる硬骨男の友情。吉本隆明、小田実、三島由紀夫らへの人物評的確さ。その思想体系ではなく、おのこの「人生」に根差して行われる批評は、形容する概念も言葉も新鮮で一編の社会小説を読む楽しさがある。

鶴見の自在さの秘密はどこにあるのか。連合赤軍事件に関連して、彼は「大義より、誰となら一緒に行動していいかを見極める」大切さを述べているが、鶴見こそ友人を見つける達人である。その文化的力がアナキズムを「連合の思想」へと高める。丸山は「鶴見は華族の生まれだから庶民

都留重人、丸山真男、竹内好、和田春樹らとの

## 思想家の82年に迫る

に甘い」とからかったそうだが、庶民にも厳しい丸山は軍歌も好きだったらしい。

一方、鶴見の出発点は厳格な母からの離脱にあった。伯爵後藤新平の娘であった母の愛情あふれるが故のせつかん。その愛情の抑圧からの自由を求めて、十五歳までに無頼と放蕩(ほうとう)の限りを尽くし、重いうつ病に陥り、切羽詰まって米国へ脱出。以後十三年間、女性との交わりを絶って学業に打ち込む。

近代の自立は父との闘いである。自らの欲望を禁止する父の大義に反抗し、別の大義を立てて自立を図る。しかし、鶴見は戦中、慰安所の運営に当たりながら禁欲を貫き、国家と性の対立を考えたという。

つまり、左右を問わず、転向自在な出世主義者のうそが、自己の欲望の実現を国家の力を借りて行う(慰安所!)点にあったとすれば、鶴見は国家や父から自由に自分が何を欲しているかを見極めようとし、それを友人たちの面白さの中に発見したのである。そこから、近代日本では「くまれな、健全で行動的なブルジョア精神が生まれた。(石村多門・東京電機大助教)



戦争が遺したもの

上野千鶴子著

戦争が遺したもの

上野千鶴子著